



KAYABA OPEN LAB.の紹介 技術と知見が交差するイノベーションハブ

永 井 勇 冨

1 はじめに

近年、技術開発を取り巻く環境は大きく変化している。製品単体の性能や品質だけでなく、それがもたらす体験や価値全体が評価される時代となり、企業に求められる役割もより複雑かつ多面的なものとなっている。

このような変化の中で、カヤバは長期ビジョンに掲げる「ゆめある、あしたをつくる。」のもと、新規事業の創出や、新たな価値の社会実装を通じた持続的な成長を目指している。その実現に向けては、自社の技術力を磨くだけでなく、社外との連携を通じて多様な視点や知見を取り込み、新たな価値を共創していく取り組みが不可欠である。特に、異なる分野や文化を持つ組織と接続することで、これまでにない発想や可能性が生まれることが期待される。

本報では、相模原市にある当社相模工場内に2026年5月に開所した「KAYABA OPEN LAB.」(写真1)について、その設立背景と狙い、ならびに社外ネットワークとの連携について紹介する。



写真1 KAYABA OPEN LAB.エントランス

2 設立の背景

当社はこれまで、長年にわたり培ってきた技術力を基盤に、多様な研究開発および製品開発に取り組んできた。一方で、過去の取り組みを振り返る中で、本来であれば新たな価値に結びつく可能性をさらに引き出す余地がある技術やアイデアが存在することも明らかになってきた。

その要因のひとつとして、研究開発の成果が外部の視点に触れる機会が限られていた点が挙げられる。技術は異なる文脈や視点と結びつくことで、新たな用途や価値を持つ場合がある。しかしながら、そうした機会が十分に確保されていない場合、本来得られた可能性が顕在化しないままに終わることもあり得る。

さらに、当社は複数の拠点を有しており、各所で培われた技術や知見が蓄積されている。これらを結び付け、多様な視点から再解釈することで、新たな価値創出や技術活用の可能性をさらに広げることができる。と考えられる。

このような背景を踏まえ、当社は技術やアイデアが多角的に評価され、新たな価値として再構成される仕組みを構築する必要があると考えた。その具体的な取り組みとして設立されたのが「KAYABA OPEN LAB.」である。

3 KAYABA OPEN LAB.の概要

KAYABA OPEN LAB.は、社内外の多様なプレイヤーが集い、共創を通じて価値創出を行うための拠点である。本施設では、来訪者と当社の技術者が同じ場に立ち、対話、検討、試作といった一連の活動を通じて、新たな価値の創出に取り組むことを前提として設計されている。

施設内には「カヤバストリート」(写真2)と呼ばれる中央通路が設けられている。その両側には、

当社が取り組む様々な技術領域の研究開発や実験のエリア（写真3）が配置されており、各エリアでは担当する技術者が日々の研究開発活動を推進している。また、来訪者が各取り組みへの理解を深められるよう、デジタルサイネージなどを活用して研究内容や実験概要を発信している。カヤバストリートを歩くことで、当社が保有する技術や研究開発の取り組みを俯瞰的に把握できるとともに、技術者との対話を通じて新たな気づきや発想を得ることができる。

また、施設内にはディスカッションスペース（写真4）も備えられており、技術者との対話を通じて課題やアイデアを共有し、共創に向けた議論を行うことが可能である。こうした体験を起点として、新たな着想を得るとともに、将来を見据えた研究テーマの創出へとつなげていくことを想定している。

施設名にある「OPEN」とは、単に外部に開かれていることを意味するものではない。多様な視点や価値観を受け入れることで、技術の可能性を拡張し、新たな価値として再構築していく姿勢そのものを指している。

施設内では、ワークショップやディスカッションを通じたアイデア創出に加え、プロトタイピングや初期検証を行うことが可能であり、従来分断されていた工程を一体化することで、価値検証のスピード向上を図る。

また、KAYABA OPEN LAB.は当社のオープンイノベーションハブとして位置づけられる。スタートアップ企業や地域企業、研究機関などとの協働においては、対話や検討を起点に共創活動へと発展させ、当社の技術やアセットを活用した価値創出を推進する。

さらに、社内においても、本施設は部門や領域を越えた交流の場として機能し、技術やノウハウの相互理解を促進するとともに、「社内存在する価値」を新たな視点から捉え直す契機となる。

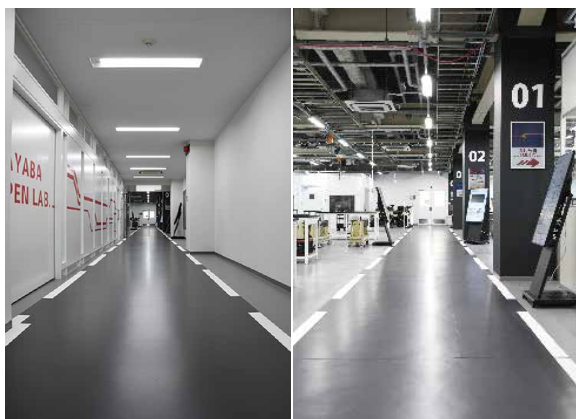


写真2 カヤバストリート



写真3 カヤバストリート沿いの実験エリア



写真4 ディスカッションスペース

4 外部ネットワークとの連携

当社を取り巻く外部環境として、相模原市におけるイノベーション創出に向けた取り組みが進展している。同市では、リニア中央新幹線の神奈川県駅（仮称）の設置を契機として、地域経済の活性化や持続可能なまちづくりを目的とした各種施策が推進されている。

こうした動きの中で、当社は相模原市および神奈川県が主導する相模原広域スタートアップ支援ネットワーク（GLiS）や、オープンイノベーション支援事業などに参画し、企業、スタートアップ、大学、行政といった多様な主体とのネットワークを形成してきた。これらのネットワークを通じて、異なる技術や視点が交差する環境が着実に広がりつつある。

KAYABA OPEN LAB.は、こうした外部ネットワークと連携し、当社が有する技術や知見を活用した共創活動を推進する拠点として位置付け、外部との接点を具体的な対話や検討の場へとつなげることで、ネットワーク上で形成された関係性を実際の価

値創出へと展開していく。

また、将来的には、スタートアップ企業や研究機関などとの協働において、本施設を起点とした試行錯誤や仮説検証を通じて、相互のアセットを活かした新たな価値創出へと発展する可能性もあると考えている。

このように、KAYABA OPEN LAB.は、外部ネットワークと当社の技術を接続し、共創活動を具体的な形へと発展させる場としても活用していきたいと考える。

5 今後の展望

KAYABA OPEN LAB.は、多様な人や技術、知見が交わり、新たな価値の社会実装を加速するイノベーションハブとして深化を目指す。

そこには、社内外の多様な立場や専門性を持つ人財が訪れ、当社の技術者とともに課題や価値について対話を重ねながら、新たな可能性を検討する場となる。こうした対話を起点として、オープンイノベーションや共同研究の枠組みを活用し、相互の技術や知見を活かした新規事業・新規プロダクトの創出へと展開する。

また、多様な視点や知見が継続的に集結することで、当社の技術はより広い文脈の中で再定義され、新たな価値として顕在化すると考える。こうした活動の積み重ねにより、価値創出から社会実装に至るプロセスを一体的に推進する。

さらに、本施設を起点とした共創活動を通じて、企業の枠を越えた連携や人財交流が進み、地域や産業において新たな価値創出が生まれる環境を育んで

いく。

6 おわりに

KAYABA OPEN LAB.の設立は、技術そのものの深化にとどまらず、価値をより早く、より広く社会へ届けていくための取り組みである。従来のような技術起点の開発だけでは、必ずしも社会実装につながらないケースも多く存在する。そのため、多様な知見や視点を持ち合わせることで、課題起点で物事を捉え、社会実装へとつなげていくプロセスへの転換が重要である。

今後、本施設を起点として、社内外の多様な技術者や関係者が交わり、それぞれが持つ技術や知識、視点を掛け合わせることで、新たな価値が継続的に生み出されていくことを期待している。また、そうした対話と試行錯誤の積み重ねを通じて、潜在している課題や可能性を顕在化させ、社会実装へとつなげていくことを目指す。

KAYABA OPEN LAB.は、カヤバの技術者一人ひとりが、社内外の垣根を越えて多様な人々と混じり合い、技術や知識を交差させながら新たな価値を創り出していくための共創空間である。ここで生まれるつながりと挑戦が、当社の価値創出を加速し、社会に対する新たな貢献へとつながっていくことを期待したい。

最後に、本施設の開所にあたり、企画・計画・設計・施工に至るまで多大なるご尽力をいただいた社員の皆様ならびに工事関係者の皆様に、ここに深く感謝の意を表する。

— 著 者 —



永井 勇牙

2008年入社。技術本部先進技術研究所企画室。新規プロダクト開発UXデザインに従事。